

---

# 主人公総受け物語～時才力編～

ハイリアの使者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

主人公総受け物語〜時オカリナ編〜

### 【Nコード】

N1107U

### 【作者名】

ハイリアの使者

### 【あらすじ】

ただでさえアニメポケ編の更新が怪しいのに、『主人公総受け物語』第2作目です（笑）。天の河がポケモンの次に好きなゲームシリーズ『ゼルダの伝説』から、特にお気に入り『時のオカリナ』を舞台にしております。例のごとく、ゲーム本編の設定を無視したキャラ崩壊の可能性大です。ですが、暖かい目で見ていただければ幸いです。

1 『ムジユラの仮面』設定を加えるかどうかについては、検討

中。ただ、当分の間は『時のオカリナ』オンリーで。

## プロローグ（前書き）

『主人公総受け物語』第2作です。

## プロローグ

ここはハイラル。以前、ある勇者が7年の時を渡りながら、世界を魔の手から救った地である。そこではその勇者に思いを寄せる少女たちが物思いに耽っていた。

？「ここハイラルが救われて以来、私はあなたのことが忘れられない……。」

？「あなたと住む世界は違う。でも、幼馴染として……いえ、好きな人としてあなたに伝えたい。」

？「わらわのフィアンセよ。そなたは今でもわらわのことを覚えておるのであるか……。」

？「妖精君。あなたの素敵なオカリナの音色を聴いて以来、あなたのことが忘れられないの。」

少女達は、ある人物の名を口に出す。

？「……リンク……。」

「ここから、一人の勇者を巡る波乱含みの物語が今始まるのであった……。」

## プロローグ（後書き）

本日、『ゼルダの伝説 時のオカリナ 3D』が発売されます。

詳しくは、活動報告を参照。

## 勇者の朝（前書き）

久々更新ですみません（汗）

## 勇者の朝

ここはコキリの森。姿がずっと子供のままといい不思議な部族・コキリ族が住む森である。この森の近くにある迷いの森に迷い込んだコキリ族以外の者は、子供ならスタルキッド、大人ならスタルフオスというモンスターになると昔から言われている。ただ一人を除いては……

？「ん、ん。あつ、もう朝か……。」

この少年の名はリンク。かつて、ハイラル、タルミナと2つの世界の危機を救った勇者である。彼はコキリ族ではなくハイラル人であるが、迷いの森に迷い込んで（間違ってもそんなことはないと思うが……）スタルキッドにはならないという不思議な少年である。

リンク「そろそろ、起きなきゃ。ん？」

リンクは起きた早々、隣に感じる違和感を感じた。

リンク「……。サリア、またかよ。」

そこにはリンクの幼馴染であり、7賢者のうちの森の賢者であるサリアが眠っていた。リンクの言葉から類推すると、リンクの寢床に潜り込んで眠っていたのは1度や2度ではないようだ。

リンク「サリア、起きてよ。」

リンクはサリアを優しく起こす。



サリア「んゝ、あつ、リンクおはよう。」

サリアは寝ぼけ眼でリンクにおはようの挨拶をする。

リンク「ねえ、思ったけどなんでいつも俺の家で寝てるの?」

リンクは当然の質問をサリアにぶつける。

サリア「それはね、リンクと一緒にだとさみしくないから。もしかして、嫌だった?」

サリアはリンクを涙目＋上目遣いでリンクを見つめる。

リンク「あつ、いや。別に嫌じゃないけど。」

リンクはサリアが泣きそうな顔だったので、慌てて言う。

サリア「じゃあ、今日も来ていい?」

サリアは急に涙を引っ込めて、リンクに言う。

リンク「（嘘泣きかよ．．．。）はあゝ、好きにして。」

サリア「ホントに!? やったあ、リンクだゝい好き。」

サリアはパアアと笑顔を咲かせると、リンクに抱き着き頬に触れるだけのキスをした。

リンク「ハハハ．．．。」

リンクは苦笑を浮かべた。

サリア「確か今日はみんなが集まって朝ごはんを食べる日だったよね。アタシ、先に行ってるからリンクも早く出てきてね。」

サリアはリンクにウィンクしてリンク宅を後にした。ちなみに言っておくが、サリアはリンクに対して好意を抱いている。だが、対してリンクは鈍感なため、未だサリアの気持ちに気づいていない。これもちなみに言っておくが、リンクに対して好意を抱いているのは、サリアだけではない。それにはハイラル国の姫君だとか、平原の牧場の一人娘だとか、魚人族の姫君だとか・・・他多数がいる。さて、このリンクをめぐる波乱はこの先どうなることやら・・・

続いて後書きショー

## 勇者の朝（後書き）

时才力の始めと言ったら、リンサリでしょ！ ドヤ顔。

時オカのはじめは・・・（前書き）

やっぱり、リンサリだと思フ作者・・・

時オカのはじめは・・・

夜中に忍び込んだサリアとともに起床したリンクは、他のコキリ族とともに朝食を摂るため、集まっていた。のだが・・・

サリア「はい、リンク。あゝん。」

朝食を食べ始めて5秒もたたないうちに、サリアがリンクに食べさせる行為いわゆる「あゝん」を試みている。

リング「いいよ、サリア。自分で食べられるから。」

リンクは周りの視線と恥ずかしさから、断ろうとする。だが、

サリア「・・・グスッ。リンク、ワタシの持ってきたの食べてくれないんだ・・・。」

サリアが今にも泣きそうな顔でリンクを見つめる。

リンク「あつ、いやだって・・・。」

リンクは頑なに断ろうとするが、

リンク「はあ、分かったよ。サリア・・・。」

結局、リンクは折れてしまった。

サリア「ホントに！　じゃあ、早速・・・。」

リンク（嘘泣きかよ．．．俺って、どうしてこっ女の子の泣きそうな姿に弱いんだろうか．．．）

自分の性格を悔やんだ時の勇者の姿がここにはあった。リンクはサリアからなんども「アーン」で食べさせてもらっ羽目になり、その光景に女子達はハラハラドキドキ、男子達は見慣れた光景に呆れた表情を浮かべた。

ミド（サリア．．．もうここまでされると逆に引くわあ．．．）

サリアのリンクに対する執拗なスキンシップにドン引きするコキリ族の長・ミドだった。

ミド「それはそうと、リンク。お前の妖精は見つかったのか？」

ミドはハイラルの危機を救って以来行方知れずのリンクの妖精・ナビィについて、リンク本人に聞いてみた。

リンク「ううん、まだ見つからないんだ。ハイラルの他にタルミナも探してみたけれど、結局見つからなかったよ。」

ミド「そっか。まあ、俺達に何かできることがあれば協力するからさ。」

リンク「ありがとう、ミド。でも、これじゃあまた『妖精なし』に逆戻りだね、アハハハハ。」

リンクは笑いながらそう言った。

ミド・サリア（リンク．．．）

ミドとサリア、否その場にいた全員にはそれがリンクのごまかしだと言うことに気が付く。その証拠にリンクは笑ってはいるが、顔が少々引き攣っている。

リンク「アハハハハ、ハハ、ハア．．．」

リンクもごまかすのに限界が来たのか、落ち込んでしまった。そして、その場は重苦しい雰囲気にも包まれる。一応食事も一通り済ませた後だったので、この重苦しい雰囲気の中、一同は解散した。だが、リンクはまだ落ち込んでいる。

サリア「リンク．．．」

サリアはリンクのことを心配して、自宅から隣にあるリンクの家をじーっと見つめる。

サリア「ここはワタシが何とかしなきゃネ。」

サリアは意を決して、お節介だとは思いつつリンクの家へと向かった。果たして、リンクはこの重々しい気分から脱して、いつもの元気な姿を取り戻すことが出来るのか．．．

続く．．．

時オカのはじめは・・・（後書き）

リンクの落ち込み様に、サリアはどうするのか!？



## サリアの励まし（前書き）

落ち込むリンクをサリアが必死に励ます話です。

かなり短いです。

## サリアの励まし

サリア「リンク？」

サリアは恐る恐るリンクの家の中へと入っていった。

リンク「あつ、サリア．．．。」

サリアに気付いたリンクは、返事をする。だが、その返事にはどこことなく元気がなかった。

サリア「リンク、やっぱり．．．。」

リンク「朝食の時はなんとかごまかせたけど、みんなが心配してくれるうちに悲しくなってくるんだ。ごめん、俺のせいでせつかくの楽しい食事を変な雰囲気にしちゃって．．．。」

さらに落ち込んでしまったリンク。そんな様子にサリアは、

サリア「リンク。一人で抱え込んだじゃダメ！」

リンク「えっ！？」

突然真剣な表情で話すサリアにキョトンとするリンク。

サリア「サリア、リンクが一人で悩んでる姿なんて見たくない！確かにワタシ達は違う種族だけど、これまで一緒に過ごしてきた仲間じゃない！」

リンク「……………」

サリアの真剣さに無言のままのリンク。

サリア「ワタシだって、森の賢者として時の勇者を支える使命がある。それに、ワタシだけが楽しく過ごしてて、リンク1人が楽しくないだなんて、そんなの嫌だヨ……………」

サリアの目に光るものが少しずつ流れ落ちていた。

リンク「ごめん、サリア。」

それを見たリンクはサリアを慰めるように抱きしめた。

リンク「確かにサリアの言うとおりだ。俺は一人ぼっちなんかじゃないのに、ずっと一人で抱え込んでいた。バカだな、俺。」

リンクはサリアに謝るように言う。

サリア「気にしないでいいヨ。今のワタシだって、感情的になってしまったんだから。冷静に考えたら、誰だって信じる仲間がいなくなったら悲しいもんね。」

サリアもだいぶ落ち着いたようだ。

リンク「俺、決めた。ナビイを探すよ。早速だけど、今から森の聖域にいかうかと思うんだけど、サリアも付いてきてくれる？」

サリア「もちろんヨ。リンクの為なら、余力を惜しまず協力するわ。」

リンク「ありがとう、サリア。」

リンクはナビィを探す決心をした。そして、すぐにサリアとともに先ずは森の聖域に行ったのだった。

続いて後書きショー

## サリアの励まし（後書き）

次回、ナビィの手がかりを探しに森の聖域へ・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1107u/>

---

主人公総受け物語～時才力編～

2011年11月17日20時44分発行